



紺田屋

笑福亭松鶴

エー一席伺ひまするは、京都のお噂で御座ります。三條の室町通りに、紺田屋忠兵衛さんと申しまして、舊家で御裕福な縮緬問屋さんが御座りました。御夫婦の中には今年十八になる一人娘で名をお花さんと申します。至つて別嬪さんで、近所では今小町と言ふて、評判娘で、御兩親は掌中の玉、蝶よ花よと可愛がつて御座つたが、月に村雲花には嵐の聲、フトした事から風邪の心地で、ぶらんく病ひサア御兩親は大層御心配遊ばしまして、醫者よ薬よ、看病よと手の届く限り御盡しになりましたが思ふやふに御全快になりまへん。或日の事、御兩親はお花さんの枕頭へお出になつて、

「コレお花や、今日は氣分がチツト宜いか、クヨクヨして却つて病氣が重なるといかん、心配をせん

と氣を確に以て早う全快なつとくれ」

と慰めますと、嬢やんは瘦せた兩手を合して涙ながらに、

「お父さんお母さん、種々御心配を掛けまして何ともお詫の申し上やうも御座りまへん。妾、今度は到底も全快らんと諦めて居るの、若し妾が死んで仕舞ひました跡で、お力落しをなされませんように先立つ不孝は幾重にもお許し草葉の蔭からお詫を致しますエ」

「コレなんで其様な心細い事を言ふて親達を泣すのぢや、なんの病は氣からと言ふよつてに、心を丈夫に持て居れば屹度全快る。モウ死ぬと言ふ様な事を言ふもんやない、ナアお母さん」

「お花や、一日も早う全快つておくれ、お前に先立たれてお父さんもお母さんも、將來何を樂しみに生きて居られよう、そやよつてに、お花や一日も早う宜うなるように」

「とは言ふものゝ人間は老少不常、何時何麼事になるかも知れん。若しお前が先へ逝やうな事でもあつたら、心残りの無いやふに何なりとも言ひ遣いたがよい。お前の事なら何でも聞いてあげる」

「ハイ有がとうオス。そんならお父様、タツタ一ツお頼みがオスのエ。聞いてお呉れやすか」

「そんなら、妾が死んでも必ず頭を刺つたら嫌エ、妾坊んさん嫌いエ」

「はア、お前が嫌やと言ふのなら決して坊さんに刺れへん、安心をしなされ」